

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 25 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370048

研究課題名(和文)中国明清道教の新研究

研究課題名(英文)New Studies of Daoism in Ming-Qing China

研究代表者

森 由利亜 (MORI, YURIA)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：30247259

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、道教儀礼を専門とする研究者を中心に国際的な研究交流を行うことで、清代道教の基本的な特徴を抽出した。すなわち(1)「士人による道教」。儒者としての立場や教養をもつ在家の信徒が従来の道教の枠組みを改変するような積極的かつ独創的な担い手となること。(2)「扶ケイの機能」。士人が道教の伝統に介入する際の重要な手段としての扶ケイの機能。(3)「在家と出家」。(4)「明清仏教との交流」。普度や戒律、あるいは十王信仰等に見る仏教との間の交流。(5)「南中国の諸宗教との関係」。ヤオ族の宗教をはじめ、清代以来の南中国の民間の宗教との関係把握、の5点である。明代道教については課題が残った。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have pointed out four important dimensions of Qing Daoism : (1)Literati Daoism, in which lay "Confucian" intellectuals played essential part; (2)Functions of spirit-writing (fuji) as a tool for penetrating, inventing and even creating "Daoist" traditions; (3) The relationship between lay Daoists and Daoists who left their own family. (4) Interactions between ritual performers of Buddhism and Daoism. (5) Relationship between Zheng-yi Daoist ritual elements and religious rites of diverse people in Southern China since Qing. About Ming Daoism, there is much space for discussion left, though.

研究分野：清代道教

キーワード：士人の道教 閔一得 扶鸞 全真教 王常月 普度 蒋予蒲

1. 研究開始当初の背景

従来の伝統的な道教研究では、六朝隋唐期や宋金元期を隆盛期とする見方が強く、その後続く明清期を衰退期と捉える見方が支配的であった。しかし、その見方は 2000 年代に入ってから、海外の研究を中心に見直される傾向が目立っていた。例えば、王崗 Richard G. Wang による『明朝の親王と道教 エリートの制度的な保護』The Ming Prince and Daoism: Institutional Patronage of an Elite, (Oxford University Press, 2012)、ヴァンサン・ゴースール Vincent Goossaert による『北京の道士達 1800-1949 年 都市型道士たちの社会史』The Taoist of Peking, 1800-1949: A Social History of Urban Clerics, (Harvard University Press, 2007)、劉迅による『近代の道教徒 民国期上海における内丹の改良・在家者の修行および共同体』Daoist Modern: Innovation, Lay practice, and the Community of Inner Alchemy in Republican Shanghai, (Harvard University Press, 2009)は、それぞれ明・清・近代の道教が多様な社会階層と結びつきながら、豊かな宗教文化をはぐくみ続けた状況を分析している。

他方、日本はもともと、道教を含む近代中国の宗教研究については先進国というべく、戦前の中国道教や民間信仰の現状に関して、小柳司氣太、酒井忠夫、吉岡義豊、五十嵐賢隆、窪徳忠、澤田瑞穂等重要な研究者が世界に先駆けて貴重な業績を残した歴史がある。それ以来、日本の中国思想史・儀礼史・宗教社会史研究は非常に盛んで、明清期についても、宝巻、善書、善堂、扶乩壇などで結びつく結社の宗教運動の研究や、白蓮教や太平天国等と連動する民衆反乱の宗教史、あるいは通俗小説と道教神との関係、地域社会の伝統宗教研究や少数民族と漢族の宗教社会的な交渉の研究など、数多くの優れた研究がなされている。ところが、そうした中で、最もオーソドックスな近世道教である正一教、全真教、内丹道研究について見ると、いくつかの重要な例外を除いて、宋元期に研究が集中し、明清期はなお手薄である。豊富な宗教研究実績があるにもかかわらず、それを道教との関連でどうとらえるか、道教史における明清期をどうとらえるかという点に至ると、漠然とした把握しかできていないというのが、本課題「明清道教の新研究」を開始する時の認識であった。

2. 研究の目的

本研究は、従来研究が手薄であった明清時代の道教について、正一教および全真教の研究者が協力し、集中的な研究を行うことで、長らく衰退期と見なされてきた当該時期の

道教を問い直すことを目的とした。具体的には、明清期の道教の最も際立った特徴がどこにあるかについて明らかにしておくことが目的となった。

特に、日本の明清研究は海外の研究に比べて出遅れている感が否めないため、この研究では海外の研究者と積極的に交流し、現在国際的な道教研究で問題とされている対象に敏感に反応しながら、明清道教の特徴的な状況、今後の研究の主要な方向性を明らかにしておくことが、重視されるべきであると考えた。

3. 研究の方法

この研究に参加する研究代表者、分担研究者はいずれも正一教もしくは全真教の道教儀礼の内容分析と歴史を専門とする。森由利亜は、今回は儀礼学的方法によって明清期の道教戒律研究を、浅野春二氏も儀礼学的方法で靈魂回収の儀礼実践とモチーフを、丸山宏氏は儀礼文献学的方法により、松本浩一氏は儀礼史学的方法により仏道の儀礼交渉史を視野にいれながら、それぞれがこれまで関わってきた道教儀礼研究を、海外の国際的な研究報告の場で、海外の道教研究者と問題意識を共有しながら、それぞれの研究上の立ち位置から明清期の道教へのアプローチをはかる。

4. 研究成果

本研究の成果の一部は、2014 年 12 月 11-12 日、香港中文大學道教文化研究中心の主監で香港中文大學で行われた 2014 清代道教研究国際學術研討會「呂祖信仰、乩壇與宗教革新」にて、本科研チームからは丸山宏氏と森由利亜が参加することで発表された。丸山氏は「清朝道光年間金蓋山呂祖道壇所創之經典初探：以『玉清贊化九天演政心印集經』・『玉清贊化九天演政心印寶懺』為中心之探討」(清朝道光年間における湖州金蓋山呂祖道壇で作成された經典の初歩的考察)と題して、モニカ・エスポジト氏が『道蔵輯要』版本(Old 2)の中に発見した稀少な文献『玉清贊化九天演政心印集經』・『玉清贊化九天演政心印寶懺』の両書について、それが 1823 年から間もない時に閔一得らによって扶乩により制作されたこと、その際、前者を踏まえて後者が作られたこと、その内容上の特質(儒教の古典特に『尚書』や『詩経』を積極的に用いて文章を構成し儒道一致の様相を呈すること、「心印」を得ることで劫災を回避すること、金蓋山の信徒たちのなかから真人となった神々を立て、信仰の導き手あるいは監視役とすること、金蓋山を万壇の中心とすること等等)制作の目的(金蓋山の復興に正当性を付与するため、金蓋山の宗風を発展させる

こと等)、閔一得と蔣予蒲の乩書集成の性格の違いなどを指摘し論じた。世界ではじめて両書の成立と内容について論じた大変重要な成果である。Daoism: Religion, History and Society, No. 7 (2015), 171-200 に論文として発表された。

同会議で、森は、“Jiang Yupu's Jueyuan altar and the Tradition of the Quanzhen: Dual Layers Found in the Attitudes of the Disciples of Lü Dongbing.” (蔣予蒲の覚源壇と全真の伝統)と題して、覚源壇の独自の内丹について議論が載せられている文献に注目し論じた。

しかし、本研究課題の最も中心的な成果は、2016年3月29日、同3月30日の両日にわたって、アメリカ合衆国ワシントン州タコマ市パシフィック・ルーテルン大学 (Pacific Lutheran University) にて第四回日米道教会議 (Fourth Japan-American Daoist Studies Conference) を開催したことである。この会議は、アメリカ側はコロラド大学ボルダー校教授テリー・クリーマン教授、日本側は本科研の研究代表者および研究分担者による主宰で行われた国際的の道教研究のシンポジウムであった。

本シンポジウムのプログラムを示すと以下の通りである。

第一日

9:00 廣瀬直記 (早稲田大学) 「上清經典年代補正—基於賀碧來先生的研究」

池平紀子 (京都産業大学)

「關於《太上洞真智慧上品大誡》的“六通智慧”」

森由利亜 (早稲田大学)

“Three Daoist Rituals of Ordination for Novices Who Leave Their Family: Preparation for placing Zhou Side and Wang Changyue in history of ordination ritual of Daoism”

田中文雄 (真言宗豊山派総合研究院)

「道教十王儀禮的發展—黃籙齋與十方—」

松本浩一 (筑波大学)

「金允中《上清靈寶大法》的普度和正薦」

浅野春二 (国学院大学)

「過山瑶族招兵儀式中的神和兵 基於湖南省藍山縣的田野調查分析」

丸山宏 (筑波大学)

「瑶族宗教儀式「拋兵」與相關問題初探」

3月30日

Terry Kleeman テリー・クリーマン (コロラド大学ボルダー校)

“The Transmission Ritual in Early Celestial Master Daoism”

Stephen Bokenkamp スティーヴン・ボーケンキャンプ (アリゾナ州立大学)

“Masters and Trials: Modes of

Transmission in Early Medieval Daoism”

Gil Raz ギル・ラッツ (ダートマス大学)

“Transmission Lineages or Communities of Practice: Buddho-Daoist Stelae of the Northern Dynasties and the Lived Religion of Local Communities”

Michael Como マイケル・コモ (コロンビア大学)

“Jade Women and Stowaways in Ancient Japan”

Liu Xun 劉迅 (ラトガース大学)

“Quanzhen Nanwu Sect in Late Ming and Qing Nanyang”

Stephen Eskildsen スティーヴン・エスキルセン (テネシー大学チャタヌーガ校)

“Has the Fontanel Opened?: Wu Shouyang Exposes a Charlatan”

Daniel Burton-Rose ダニエル・バートンローズ (プリンストン大学)

“The Daoist Commitments of the Peng Clan of Suzhou, 1673-1830”

日米道教会議は、明清道教以外の分野の専門家も交えて行われた。まず、それらについて紹介すると、廣瀬直記氏「上清經典年代補正—基於賀碧來先生的研究」(上清經典年代の補正 イザベル・ロビネ先生による研究を元に)では、上清經研究の権威である故イザベル・ロビネが確定した上清經の成書年代を再検討し修正を加えるもの。六朝道教經典の基礎研究である。

池平紀子氏「關於《太上洞真智慧上品大誡》的“六通智慧”」(『太上洞真智慧上品大誡』にみえる「六通智慧」について)では、六朝期に成立した靈寶經典『太上洞玄智慧上品大誡』の中に出る「六通智慧」の概念を分析し、靈寶經の戒概念の中で仏教と道教の想定や文脈が交錯するさまを分析する。仏教のいわゆる中国撰述經典に見られる文化的な混合と同様の混淆が、道教經典として現れる状況を考察していると考えられよう。

田中文雄氏「道教十王儀禮的發展—黃籙齋與十方—」(道教における十王儀禮の展開 黄籙齋と十方)では、道教典籍に見られる十王經は、道教の死者儀禮である黄籙齋を基盤に中国仏教の十王の概念を一体化させて発展してきたもので、単純に仏教の十王儀禮を模倣したものではないことを論じた。

松本浩一氏「金允中《上清靈寶大法》的普度和正薦」(金允中『上清靈寶大法』における普度和正薦)は、近世黄籙齋に見える、破獄から煉度を経て授戒・伝符に至る一連の死者救済の儀禮プロセスについて、金允中『上清靈寶大法』をとりあげ、その内容を家の死者を救済する「正薦」と無数の死者を救済する「普度」の違いを軸に蔣叔輿『無

上黄籙大齋立成儀』と比較分析した。両書の普度と正薦の儀礼自体はほとんど一緒だが、金允中は当時黄籙齋にコミットした儒者たちとの共有項がやや目立つことや、正薦の救済原理として「一性」の回復を強調すること、招魂後に死者の身体を補正する「治療疾病」を批判して採らない民間信仰批判が指摘できること、使用概念において儒家や水陸齋の概念との共通性が指摘し得ることなどを明らかにした。

次に、明清期に関わる報告としては、森由利亜は、“Three Daoist Rituals of Ordination for Novices Who Leave Their Family: Preparation for placing Zhou Side and Wang Changyue in history of ordination ritual of Daoism”（道教出家伝戒儀三種

周思得を王常月を道教の伝度儀の歴史に位置づけるために）では、六朝期以来、明代に至る道教の出家伝戒儀礼が、基本的には同じ構成要素を有するものであり、はじめて出家する道士に十戒を授ける儀式が安定的に行われてきたことを指摘した。しかし、その反面において、仏教における沙弥十戒の授戒とは異なって、道教の場合は時代によって、授けられる十戒の内容は異なるという、若干不安定な側面もあることをも指摘した。議論の中心的な意図は、道教における出家伝戒が明代にまで引き継がれ、おそらくそれが17世紀中期、清初の王常月によって継承されることを明らかにする点にある。

浅野春二氏による報告「過山瑶族招兵儀式中の神和兵 基於湖南省藍山縣の田野調査分析」（過山瑶族の招兵儀式における神と兵 - 湖南省藍山県でのフィールドワークをもとに）は、湖南省永州市藍山県ユーミエン系ヤオ族の儀礼における「招兵」について、主として「五穀兵」と称される穀物の靈魂を回収する儀礼と、家先壇に蓄積される家先兵を回収する儀礼について考察した。法師が儀礼を行う家の家先兵を派して、家から飛走している兵を回収するという同じ構想を有する儀礼の構成要素が、異なる儀礼文脈で行われることにより、重層的な意義をもつ事実を指摘する。一見単純に見える儀礼に重層的な解釈のレベルが存在することを、法師の理解と報告者自身の分析を通じて浮き彫りにした。

また、丸山宏氏「瑶族宗教儀式「抛兵」與相關問題初探」（ヤオ族宗教儀礼「抛兵」および関連する問題について）湖南省永州市藍山県ユーミエン系ヤオ族の法師が新弟子のイニシエーションに際して行う「抛兵」（兵と呼ばれる神々を弟子に分与する）儀礼と、藍山ヤオの宗教的世界観における兵と人と

の関係を、ヤオに伝承される文献（現地の諸文献と、英国オックスフォード大学ボドレアン図書館蔵文献）を詳細に読み解き、フィールドワークでの観察と総合することで解明した。すなわち、現地の「抛兵歌」を分析して抛兵儀式を再構成し、更に、個別の文献と観察によりながら、生前死後を問わず常に兵が法師に帯同され、家に蓄積され、人と兵の関係を表象するための儀礼や表現、法具等がその宗教文化の全体にわたって豊かに配置されているさまを明らかにした。

アメリカ側も同様に、明清期以前の時代についても報告がなされたが、ここでは明清期の報告について示す。

スティーヴン・エスキルセン氏（テネシー大学・チャタヌーガ校）は、“Has the Fontanel Opened?: Wu Shouyang Exposes a Chelatan”（「頭頂は開いたのか？伍守陽がインチキ道人を暴く」）という題で、明末の有名な内丹道修行者である伍守陽がその門弟と交わした問答の記録の中に、内丹の修行によって頭頂が開いたと鼓吹するある北京から来た修行者がいることをめぐって、その修行者を偽修行者として貶めるくだりを取りあげ考察した。生々しい状況描写のなかから明末江南の内丹道修行者の師弟が、周辺にいるさまざまな修行者の状況にアンテナを張り相互に参照しつつ、自分たちの学びに生かす状況に光を当てることで、当時の修行者たちの学びの場の様相を詳細に浮き彫りにした。

ダニエル・バートン=ローズ氏（プリンストン大学）は、“The Daoist Commitments of the Peng Clan of Suzhou, 1673-1830”（蘇州彭氏による道教への関与）と題する報告において、清朝蘇州の有力氏族である彭氏、とりわけ彭定求とその父彭瓏が、当時天師道道士として朝廷に尊崇される施道淵（1617-1678）と緊密な結びつきをもっている事実を周到に描きながら、清朝士大夫が単なる好事家の範囲にはおさまらないほど真剣に道士と交流する状況を指摘した。後半は、彭氏による積極的な道書の出版が論じられ、彼らが道教に関わる動機の中に孝の実践が重要な地位を占めていることが強調された。また、宗族が道書を出版する際に、道士がいかなる関与をし得るかという、重要な問題が提起された。

劉迅氏は“Quanzhen Nanwu Sect in Late Ming and Qing Nanyang”「晚明から清朝期にかけての南陽における全真教南無派について」と題して、明末から清末に至るまでの南陽の武侯祠および医聖祠において、信仰的には譚処端の法系を継ぐとされる南無派の道士たちが、厳格な系譜意識を維持しつつ、官

僚による祭祀と、公的な性格に拘束されない民間の信仰との両面にわたって、祭祀の担い手などとしてコミットするさまを明らかにした。清朝全真教の派としては龍門派がよく知られているが、劉氏は長年の南陽での調査結果を踏まえ、これまで必ずしも十分な光が当てられているとは言い難い南無派について、具体的な社会的状況を背景にしつつその地域的役割を分析した。

以上が日米道教会議の報告内容の骨子である。

上記のシンポジウムを通じて、以下に本課題研究が到達した清朝道教の特徴もしくは重要問題を、以下のように四点に整理しておきたい。

(1) 士人の道教

既に触れた丸山宏氏「『清朝道光年間金蓋山呂祖壇所創之經典初探』、および日米道教会議でのバートン＝ローズ氏の報告にある通り、清朝期の道教における基本的な様態として、在俗知識人層が主担となる活動が非常に重要な部分を担う事実について、この研究ではさらに考察を深めることができた。逆説的な言い方をすれば、儒者の道教ともいえる道教の考察である。彭定求、蔣予蒲、関一得はいずれも儒者としての社会的立場もしくは/および教養を踏まえた上で、彼らは彼らが想定するところの道教の権威に主体的に関与している。その関与の仕方は様々で、バートン＝ローズ氏が扱った彭氏のように道観にいる道士と積極的に関わり、同時に善書などの出版に精を出す者もあれば、丸山氏や森が扱った蔣予蒲のように、呂祖の扶乩を通じて呂祖信仰にいそしみつつ、呂祖の扶乩をプラットフォームとして全真教の儀礼を補強したり、更に道教の神体系の最も高い地位に自分たちの祖師の位置を設定して、見方によっては相当恣意的に作られた権威によって『道蔵』を作り変えるというような大胆な試みを行う者がある。あるいは、関一得のように、清初の道士王常月を経由する全真教龍門派の系譜の正統性を、虚構を設けながら創作しつつ、自分をその末に位置づけ、その一方で歴史的には王常月の最も有力な弟子の系譜を抹消するような営みを行い(以上は森由利亞「呂洞賓と全真教 清朝湖州金蓋山の事例を中心に」砂山稔編『講座道教・第一巻・道教の神々と經典』東京：雄山閣出版、1999年および同「『龍門心法』と『碧苑壇経』

詹太林と関一得における王常月への異なる視座」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』57輯2002年、参照)、金蓋山の呂祖壇を復興するために金蓋山中心の排他的な宗教体制を構築するような者がある(丸山宏上掲論文2016年)。

(2) 扶乩信仰

扶乩(ふけい・フーチー)とは、降筆、所謂お筆先である。この研究では、上記の「士人の道教」と密接に関わる事項として、清朝道教における扶乩の重要性も確認され、より探究を深めることができた。特に、丸山宏氏による金蓋山における『玉清贊化九天演政心印集經』と『玉清贊化九天演政心印寶懺』に関する研究は、関一得の扶乩信仰に新たな光を与えることになった。士大夫が道教にコミットする際に、扶乩は機能的で重要な役割を果たす。

(3) 在家と出家

日米道教会議では、劉迅氏やバートン＝ローズ氏が出家道士と世俗の人士の交流を描き分析したが、在俗の士人と、戒律によって厳格に律せられ、道観で暮らし、あるいは放浪し、あるいは孤立的に活動する出家道士たちとの関係に、清朝道教の重要な特色があることが明らかになってきた。しかし、その解明はまだまだ進んでおらず、今後の重要な課題である。在俗の士人たちは、制度的には道士ではなくとも、道士と密接な連絡をもったり、あるいは蔣や関のように、道士の従うべき授戒儀礼や清規のような規範制度の枠組みを創出もしくは再生させることすらできる。

なお、明清期における出家授戒儀の歴史を明らかにすることは、今後もひきつづき重要な課題である。

(4) 明清期以降の仏教道教の交流

明清期の道教が普度や十王信仰を通じて、仏教と並行しながらどのような儀礼を展開したかについては、今回の日米道教における松本浩一氏と田中文雄氏の研究によりある程度方向性が予期されたともいえるであろう。ただ、明清期の展開を具体的に探究するのは今後の重要な課題である。森由利亞は、「王常月の三層戒構想と一七世紀江南金陵仏教における戒律改革運動：王常月・漢月法蔵・見月讀體」『東洋の思想と宗教』33、2016の中で、明末清初に南京を中心に展開した仏教の三壇戒が、やはり清初に南京を中心に活動した王常月とその弟子たちの三大戒構想に影響を与えたはずであることを論じた。

(5) 明清期の南中国の民間儀礼と道教儀礼

ヤオ族の儀礼をはじめ、南中国の各地には道教儀礼の諸要素や儀礼構造を共有する現象を見ることができる。例えば、浅野春二氏が探究する飛散した靈魂を回収する儀礼モチーフは、その典型といえる。丸山宏氏の議論の中では、藍山ヤオの儀礼における三清の

とらえ方や、「部籙」の意義が厳密に定義されたが、道教との相似点だけでなく、差異点についても厳密な研究を可能にする地平が、本研究過程において開かれたといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

森由利亜「道教の出家戒の成立と継承」『WASEDA RILAS JOURNAL』No.3 (2015.10)

Yuria MORI, “Tracing Back Wang Changyue’s Precepts for Novices in the History of Daoism.” Daoism: Religion, History and Society, No8, 2016, 207-249.

森由利亜「王常月の三層戒構想と一七世紀江南金陵仏教における戒律改革運動：王常月・漢月法蔵・見月讀體」『東洋の思想と宗教』33, 2016. 45-66.

松本浩一「佛教施餓鬼與道教普度」,「比較視野中的道教儀礼」國際學術研討會(香港・中文大學)會議論文集, p.420-435, 2015.12.

松本浩一「靈寶領教濟度金書」の普度與正薦, 首屆國際道教文化前沿論壇論文集, p.105-121, 2016.7.

丸山 宏「清朝道光年間金蓋山呂祖道壇所創之經典初探：以『玉清贊化九天演政心印集經』・『玉清贊化九天演政心印寶懺』為中心之探討」 Daoism: Religion, History and Society, No. 7 (2015), 171-200.

〔学会発表〕(計6件)

森由利亜 “Jiang Yupu’s Jueyuan altar and the Tradition of the Quanzhen:

Dual Layers Found in the Attitudes of the Disciples of Lü Dongbing.” 2014 清代道教研究國際學術研討會「呂祖信仰、乩壇與宗教革新」2014年12月11-12日, 香港中文大學道教文化研究中心主辦(於: 香港中文大學)

森由利亜 “Three Daoist Rituals of Ordination for Novices Who Leave Their Family: Preparation for placing Zhou Side and Wang Changyue in history of ordination ritual of Daoism” 第四回日米道教会議 (Fourth Japan-American Daoist Studies Conference) 2016年3月29日、同3月30日、アメリカ合衆国ワシントン州タコマ市パシフィック・ルーテラン大学 (Pacific Lutheran University)

丸山 宏「清朝道光年間金蓋山呂祖道壇所創之經典初探：以『玉清贊化九天演政心印集經』・『玉清贊化九天演政心印寶懺』為中心之探討」2014 清代道教研究國際學術研討會「呂祖信仰、乩壇與宗教革新」2014年12月11-12日, 香港中文大學道教文化研究中心主辦(於: 香港中文大學)

丸山宏「瑤族宗教儀式「拋兵」與相關問題初探」第四回日米道教会議 (Fourth Japan-American Daoist Studies Conference) 2016年3月29日、同3月30日、アメリカ合衆国ワシントン州タコマ市パシフィック・ルーテラン大学 (Pacific Lutheran University)

松本浩一(筑波大学) 「金允中《上清靈寶大法》の普度和正薦」第四回日米道教会議 (Fourth Japan-American Daoist Studies Conference) 2016年3月29日、同3月30日、アメリカ合衆国ワシントン州タコマ市パシフィック・ルーテラン大学 (Pacific Lutheran University)

浅野春二(国学院大学)「過山瑤族招兵儀式中的神和兵 基於湖南省藍山縣的田野調查分析」第四回日米道教会議 (Fourth Japan-American Daoist Studies Conference) 2016年3月29日、同3月30日、アメリカ合衆国ワシントン州タコマ市パシフィック・ルーテラン大学 (Pacific Lutheran University)

〔図書〕(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

森由利亜 (MORI, Yuria)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号: 30247259

(2)研究分担者

松本浩一 (MATSUMOTO, Koichi)
筑波大学・図書館情報メディア系・教授
研究者番号: 00165888

丸山宏 (MARUYAMA, Hiroshi)
筑波大学・人文社会系・教授
研究者番号: 00229626

浅野春二 (ASANO, Haruji)
國學院大學・文学部・教授
研究者番号: 30289741

鈴木健郎 (SUZUKI, Takeo)
専修大学・商学部・准教授
研究者番号: 40439518

(4)研究協力者

廣瀬直記 (HIROSE, Naoki)
池平紀子 (IKEHIRA, Noriko)
田中文雄 (TANAKA, Fumio)